京都——涼景寸刻

風流な川床、優雅を極める祇園祭、
夜空に浮かびあがる五山の送り火……
京都には、古都ならではの
夏の風物詩がいくつもあります。
一方で、中心部から少し足を延ばせば、
心地よい風が吹く自然豊かな場所も。
山、海、川——京都在住の写真家・
星野佑佳さんが切り取った一瞬の涼。
夏景色のなかの
〝束の間の京都〟です——。

写真・解説＝星野佑佳
Hoshino Yuka

■ 琴引浜の丹後ブルー［京丹後市網野町］

「丹後半島の西部に位置する琴引浜〈ことひきはま〉は、砂に石英などの鉱物が含まれており、歩くと摩擦でキュッキュッと音がする鳴き砂の浜として有名です。京都市内からだと夏は琵琶湖へ湖水浴に行く人が多いのですが、私はなぜか丹後の海を見たくなります。子供の頃に家族と来た思い出があるからかもしれません。全長1.8キロにわたる浜で、撮影地は東端。駐車場からはかなり歩くので熱中症対策をお忘れなく！　やはり夏は暑いですが、晴天の日の早朝は、風が吹くと心地良くて、美しい海の青さからも涼を感じられますよ」

ほしの ゆか／写真家・フォトエッセイスト。京都市生まれ。同志社大学法学部卒業。2000（平成12）年から国内外を放浪しながら撮影を始め、05年より地元京都の風景や風物詩の撮影を手掛ける。著書に『京の祭と行事365日』（淡交社）やフォトエッセイ集『撮り旅』（風景写真出版）がある。

■ 夕暮れの経ヶ岬［京丹後市丹後町］

「経ヶ岬〈きょうがみさき〉は丹後半島の先端、近畿地方の最北にあって、柱状節理の海食崖など雄大な自然が間近に見られます。真っ白な経ヶ岬灯台との対比を、海風に吹かれながら眺める夕暮れは気持ちのいい時間です。遊歩道もありますが、野生動物が出没する自然豊かなところなので、歩きやすい服装でお出かけくださいね」

■ **伊根の舟屋** [与謝郡伊根町]

「舟屋〈ふなや〉」と呼ばれる民家が海の上に浮かぶように立ち並ぶ景観が人気の伊根町〈いねちょう〉。伊根町観光協会が主催する『舟屋3ヵ所巡り』に参加した際に撮影した一枚です。昔から変わらぬ舟置き場からの景色で、時がゆっくり流れているような感覚になりました」

＊「舟屋3ヵ所巡り」については下記をご参照ください

HP https://www.ine-kankou.jp/active/naibu

特集

八幡浜［愛媛県］

モダニズムの建築家

松村正恒の小学校

協力＝花田佳明
Hanada Yoshiaki
文＝橋本裕子
Hashimoto Yuko
写真＝荒井孝治
Arai Koji

喜木川〈ききがわ〉沿いに立つ日土小学校。山頂近くまで耕されたみかんの段々畑が校舎を囲む

八幡浜市立日土小学校——
北に伊予灘、西には宇和海、
四国は愛媛県の西端の
いくつものみかん山を越えた
山間の小さな集落に立つ
世界的に評価の高い建築です。

小さな歩幅にぴったりの階段、
やわらかな自然光あふれる教室、
心地よい廊下の一隅……
徹底的に「子どもの視点」にたった
その学校をつくったのは松村正恒。
今ではあまり知られていませんが、
戦後の日本を代表する建築家です。
ときには「年中無休建築士」と自称し、
独自のモダニズム建築を実践しました。

そんな松村の無二の人生と作品と、
その舞台となった八幡浜の歴史、
そして、現在進行形で活躍する
八幡浜の人々を紹介します。

光あふれる子どもたちの学び舎

松村流「学校らしくない学校」へ

**「モダニズム建築」というと、斬新でクールな建物を想像しませんか？
けれども、八幡浜の山間の集落で我々を迎えてくれたのは、どこか温かく、
まるで自分が通っていたかのような懐かしさに満ちた学び舎でした。
一歩足を踏み入れれば、時を超えて思い出の数々がよみがえるようです――**

学校の昇降口は、校舎の裏の北側にある。みかん畑の間を走るこの細い山道が通学路だった

通っていた小学校の校舎を、覚えていますか？

私たちがこれまで過ごしてきた多くの建物のなかで、とりわけ懐かしく感じたり、その細部まで鮮明に思い出したりすることができるのは、小学校ではないでしょうか。あの頃の記憶の蓋をひとたび開けば、好きだった子の笑顔やしでかした悪戯、先生のしかめっ面などが次々と飛び出してくるようです。いい思い出も、ほろ苦い思い出も――。

東京からUターンした「年中無休建築士」

思い出に残る学校を創りたい、半端者の戯れごとです、人の心にしみる、焼きつく、生やさしいことでは、ありません。[*1]

愛媛県の西端、対岸の大分県へ腕をぐんと突き出したような佐田岬半島の付け根に位置する八幡浜市。ここに、こんな言葉を残した建築家がいた。自ら無級建築士、あるいは無給建築士と称した松村正恒［1913～1993］である。

「ときには、『年中無休建築士』なんて自称していたこともあるそうですよ」

そういいながら迎えてくれたのは、八幡浜市教育委員会・生涯学習課の宇都宮菜乃さんだ。

松村正恒は、1960（昭和35）年、「文藝春秋」5月号で、前川國男、丹下健三[*3]らと並び、「日本を代表する10人の建築家」に選ばれた著名な建築家……と聞いている。だが、今やその名は、一般

平地の少ない山間の集落で、できるだけ校庭を広くするために、校舎は山に寄せて建てられている

＊1 以下、引用はすべて『老建築稼の歩んだ道　松村正恒著作集』花田佳明編、鹿島出版会、2018年
＊2 [1905～1986] 東京帝国大学建築学科卒業後、渡仏してモダニズムの建築家ル・コルビュジエ（36頁に注）に師事。帰国後は日本の建築界のリーダーとなった。代表作に京都会館、東京文化会館など
＊3 [1913～2005] 前川國男の建築事務所を経て、広島平和記念資料館の設計でモダニズム建築の旗手としてデビュー。香川県庁舎や国立代々木競技場などで日本のモダニズム建築を海外に知らしめた

北面の廊下。左手は引き戸などの建具のない開放形式の昇降口。その上部の窓から差し込む光は、廊下を横切り、教室のなかにまで達する

日土小学校

66名の児童が通う現役の小学校

その小学校があったのは、八幡浜市の中心部から北へ6キロほど行った、のどかな集落だった。夏にはホタルの飛ぶ姿が見られる清流、喜木川沿いに立つ八幡浜市立日土小学校。谷筋の底に突如現れた、堂々たる木造モダニズム建築の学校である。

[左]校長の藤堂玄人さん。改修前は日土小学校で担任を持ち、改修後に校長として再び日土小学校に赴任した　[右]図書室の小さな椅子や机も松村の手によるもの。座面のやわらかなカーブに、子どもの座り心地への配慮が感じられる

松村が設計したのは、運動場から見て右側の中校舎と左側の東校舎。前者は1956（昭和31）年、後者は1958年に竣工した。東校舎が完成した2年後、松村は、前述したように「日本を代表する10人の建築家」に選ばれている。この小学校こそが、松村を前川や丹下らと並ぶ建築家に押し上げたのだ。

運動場がある北側から校舎を眺める。木造2階建て、若草色の切妻屋根*を載せた校舎は、よく見ると何種類ものパステルカラーに塗り分けられ、ほぼ全面がガラス窓で覆われていた。

「窓掃除が大変そう……」

どうかお許しあれ。「明るいですよね」という宇都宮さんの言葉に、間抜けにもつい反射的に返してしまった。それほど目の前に出現した日土小学校は、これまでに見たことのない外観だったのだ。

「学校建築としての斬新な設計はもちろんですが、この建物が特別なのは、今も児童66名が通う現役の小学校であることです」と宇都宮さんが胸を張る。

中校舎と東校舎は、2012（平成24）年に重要文化財に指定された。〈合理的な構造〉によって〈豊かな空間〉をつくり上げた、〈木造のモダニズムの優れた作品〉として、その価値が高く評価されたのである。戦後の建造物としては4件目、戦後の木造建築、また学校建築としては初の例だった。

「なかへ入ってみましょう」

宇都宮さんに促されて、中校舎の昇降口へ。靴を脱いでいると、あちこちから声がかかる。

北側から見た日土小学校の校舎。1956年竣工の中校舎（右）と1958年竣工の東校舎が渡り廊下で繋がれている

南側から見た日土小学校。喜木川に身を乗り出すようなベランダや外階段が特徴。写真手前が東校舎で、奥が中校舎

「こんにちは！」

訪問したのはお昼過ぎ。給食を食べ終えた子どもたちが膳を下げながら、口々に挨拶をして通り過ぎていく。階段を駆け上がって教室へ戻る子どもたちの後ろ姿を見ながら、蹴上（けあげ）（階段の1段分の高さ）がひどく低いことに気づいた。

「低学年の児童にも楽に昇降できる低く緩やかな階段は、松村の学校建築の特徴のひとつです。柱は面取りしてあるし、廊下の角が斜めになっているのも、出会い頭にごっつんこしないためなんですよ」（宇都宮さん）

「走らないの！」

どこからか先生の声が飛んだ。いつの時代も子どもたちのエネルギーは変わらない。その足先は空気が満タンに詰まったボールのように弾んでいる。

保存か建て替えか——沸き起こった議論

子どもたちにお気に入りの場所を聞いてみた。

「わたしのおすすめは図書室。川が見えるベランダに出るとテンションが上がる！　厚い本を図書室で読むのが好き」（寺崎希（のぞみ）さん、6年生）

「図書室の壁の星座も忘れずに見てね！」（泉田康希（こうき）さん、6年生）

＊ 本を開いて伏せたような形状の、2つの斜面からなる屋根のこと

松村正恒の足跡が残る

八幡浜の歴史と今

海運、紡績、鉱山で栄え、明治時代には「伊予の大阪」と称されるほどの賑わいを見せた地。その名残を今に伝えるレトロな町並みの数々と、自然の恵みとともに生きる人々を紹介します。

[上] 宮内川沿いにつくられた遊歩道「もっきんろーど」。左が旧東洋紡績の赤レンガ倉庫。この地での紡績業の歴史は、1887（明治20）年に設立された宇和紡績にさかのぼる　[下] 松村正恒の良き理解者としてその活躍を支えた、八幡浜市長、菊池清治邸。2020年に改修工事が完了し、一般公開されている

のんびりしていて新しもの好き

都市の中に、堂々と品格のある奥ゆかしい、歩いていて心の清められる一廓がある、これこそ都市の魅力であり誇りであります。もちろん住む人の人格が肝要、成りあがりが肩いからしては台なし。

松村正恒が晩年に著した回顧録の一節である。まさに八幡浜は、松村が語る都市の魅力と誇りを体現した町だった。

新町商店街にある老舗食堂「ロンドン」で、知る人ぞ知る八幡浜のソウルフード「ちゃんぽん」をいただいてから向かったのは、松村を陰日向になって支えた市長、菊池清治（せいじ）の邸宅。漆喰塗の白壁には、見事な装飾が施された部材がいくつも連なっている。

「あれは、『持ち送り』と呼ばれる軒を支える補強材です。立派であればあるほど、その家が栄えていることを表したそうですよ」と宇都宮さん。

江戸時代末期から昭和時代にかけて、八幡浜は海運に始まり、紡績、鉱山、養

[上] 1950（昭和25）年創業の老舗「ロンドン」を切り盛りする、2代目の菊池ヒデさん。ちゃんぽんはたっぷり野菜に、にごりのない鶏ガラスープ。コショウのピリッと効いた、飽きのこない美味しさが人気の秘訣だ

古い家並みが残る八幡浜市の保内地区。細い路地が海へと続く。左の建物は、豪商、菊池重久の邸宅「西のおやけ」の一部

蚕とさまざまな産業が栄え、明治時代には「伊予の大阪」とまで称された。町には菊池清治邸のほか、海運業で財をなした菊池重久の邸宅「西のおやけ」、鉱山業や紡績業の経営で名を馳せた白石和太郎邸の贅を尽くした洋館、経済産業省の近代化産業遺産に登録されている旧東洋紡績赤レンガ倉庫など、この地の繁栄の歴史を物語る建物が多く残されている。その景観はまるで、レトロな町並みミュージアムだ。

「八幡浜の人たちは、のんびりしている一方で新しもの好き。進取の気性に富んだ先人たちがたくさんいました。だから建物も個性豊かなのかも。おもしろいで

地元にエール
これ、いいね！
Vol.053

日和佐のウミガメ

1億年の浪漫に満ちた「海の神の使い」

徳島県海部郡美波町

文＝神田綾子 Kanda Ayako
写真＝佐々木実佳 Sasaki Mika

「日和佐うみがめ博物館カレッタ」ではアカウミガメ（写真）をはじめ100頭ほどのカメを間近に見られる

ウミガメの産卵地として知られる徳島県美波町日和佐地区の大浜海岸。ここは日本のウミガメ保全の発祥地でもある。始まりは1950（昭和25）年、呼びかけは地元の男子中学生だった。

「肉を削がれたウミガメの亡骸を、彼が海岸で見つけたんです。食糧難の時代でしたから、食用に捕獲されたのでしょう。そこで『こんな悲惨なことが二度と起きないように』と仲間を集めてウミガメの観察記録を始めたそうです」と田中宇輝さん。日本で唯一のウミガメ専門の博物館「日和佐うみがめ博物館カレッタ」の学芸員だ。

「本人たちは純粋にウミガメを思う気持ちから研究していただけなので、1988（昭和63）年の『日和佐海亀国際会議』で、その成果が先駆的だと学者に高く評価されて驚いたそうです」

近年、大浜海岸で産卵するウミガメは減少しているが、[*1]そもそもウミガメは全種、IUCN[*2]のレッドリストに掲載されている。個体数の減少は地球規模で深刻なのだ。美波町では1995（平成7）年に「ウミガメ保護条例」を制定し、

＊1　令和以降の上陸回数は年間10回未満　＊2　国際自然保護連合

おいしいもんには理由（わけ）がある

第44回

文＝土井善晴
Doi Yoshiharu
写真＝荒井孝治
Arai Koji

日間賀観光ホテルの定番人気メニュー、茹で蛸と蛸飯。蛸は小ぶりながらうま味が濃く、蛸しゃぶや刺身などでも楽しめる

海風に吹かれて、蛸やフグなど豊かな海産物で知られる小さな島を散策しました

日間賀島で島遊び

《愛知県知多郡南知多町》

[左] 島には西港・東港の2つの港があり、どちらでも蛸のオブジェが観光客をお出迎え。「これはかわいらしいわ」と、手（足？）を繋ぐ土井さん　[右下] 小さな島ながら、港には漁船が並び、漁師町の活気が感じられる。知多半島と渥美半島の3つの港から定期船で10〜30分と近く、気軽に遊びに行けるのも魅力

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）など著書多数

大阪生まれの私、五穀豊穣と商売繁盛の神さま「えべっさん」（恵比須神）が、鯛を抱えているのだから、大阪（人）を象徴するものは鯛であると言いたいところですが、どうもこの頃、大阪といえば蛸と思われているようです。確かに1990年代から、タコ焼きで名を馳せたというのは言い過ぎかなあ。でも、それなりに大阪の庶民文化を牽引したことは間違いありません。なんせ、アメリカのクリントン大統領が大阪に来るとき、「タコ焼きを食べてもらいたい」と言った人がありました。まあ、そうしたウエストサイドの食文化論はさておき、大阪人は蛸の茹で加減にはうるさい。私が魚屋さんで茹で上げた大きな蛸を買うなら、まだ付け根が半生の太い足を2〜3本、ねっとりしたところを求めます。

さて今回の取材先は、私には聞き慣れぬ日間賀島。格別おいしい蛸がとれるという小さな島を訪ねます。

蛸尽くしのおもてなし

日間賀島は知多半島から約2・4キロ。その北東に佐久島、南に篠島があります。

三河湾と伊勢湾の境をつくる知多半島の先の沖にあたり、岐阜の深い山から流れ込む川がよい漁場を作っているそうです。島の人口は約1800人。ほとんどの人が漁業に関わって生きてきた島なのです。

日本六古窯のひとつ、常滑焼のある知多半島をぐっと南下、河和港で予約していた海上タクシーに乗りこむと、5分で日間賀島の西港に到着。あまりの近さに驚いて陸に上がると、送迎車が待っていました。西港は観光客向けに名物を売る飲食店や蛸の干物を洗濯物のように吊るした海産物のお店が並び、活気がありました。大きな赤い蛸のモニュメントや蛸をモチーフにした駐在所など、何かと蛸に因んだものと出会うのです。

道路端を歩いている青いジャージーの集団は岐阜から修学旅行にきた中学生だと、